

平成25年度

# 秋田県埋蔵文化財 発掘調査報告会

平成26年3月9日（日） 会場 秋田県生涯学習センター



大仙市大川端道ノ上遺跡（中世の掘立柱建物跡）

主催 秋田県埋蔵文化財センター

# 目次

平成25年度県内発掘調査遺跡一覧表 …… 表紙裏  
 平成25年度県内発掘調査遺跡位置図 …… 1  
**大川端道ノ上遺跡** …… 2  
 報告者：秋田県埋蔵文化財センター調査班 伊豆俊祐文化財主事  
**神谷地遺跡** …… 4  
 報告者：横手市教育委員会文化財保護課 信太正樹主査  
**史跡秋田城跡** …… 6  
 報告者：秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所 神田和彦主査  
**史跡払田柵跡** …… 8  
 報告者：秋田県教育庁払田柵跡調査事務所 五十嵐一治学芸主事

**貝保遺跡** …… 10  
 報告者：秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 山村剛学芸主事  
**岩瀨蔵遺跡** …… 12  
 報告者：由利本荘市教育委員会文化課 長谷川潤一主席主査  
 下内野Ⅳ・Ⅴ遺跡 …… 14  
 中茂屋遺跡 …… 16  
 滝沢城跡 …… 18  
 小出遺跡 …… 20  
 年表 …… 裏表紙

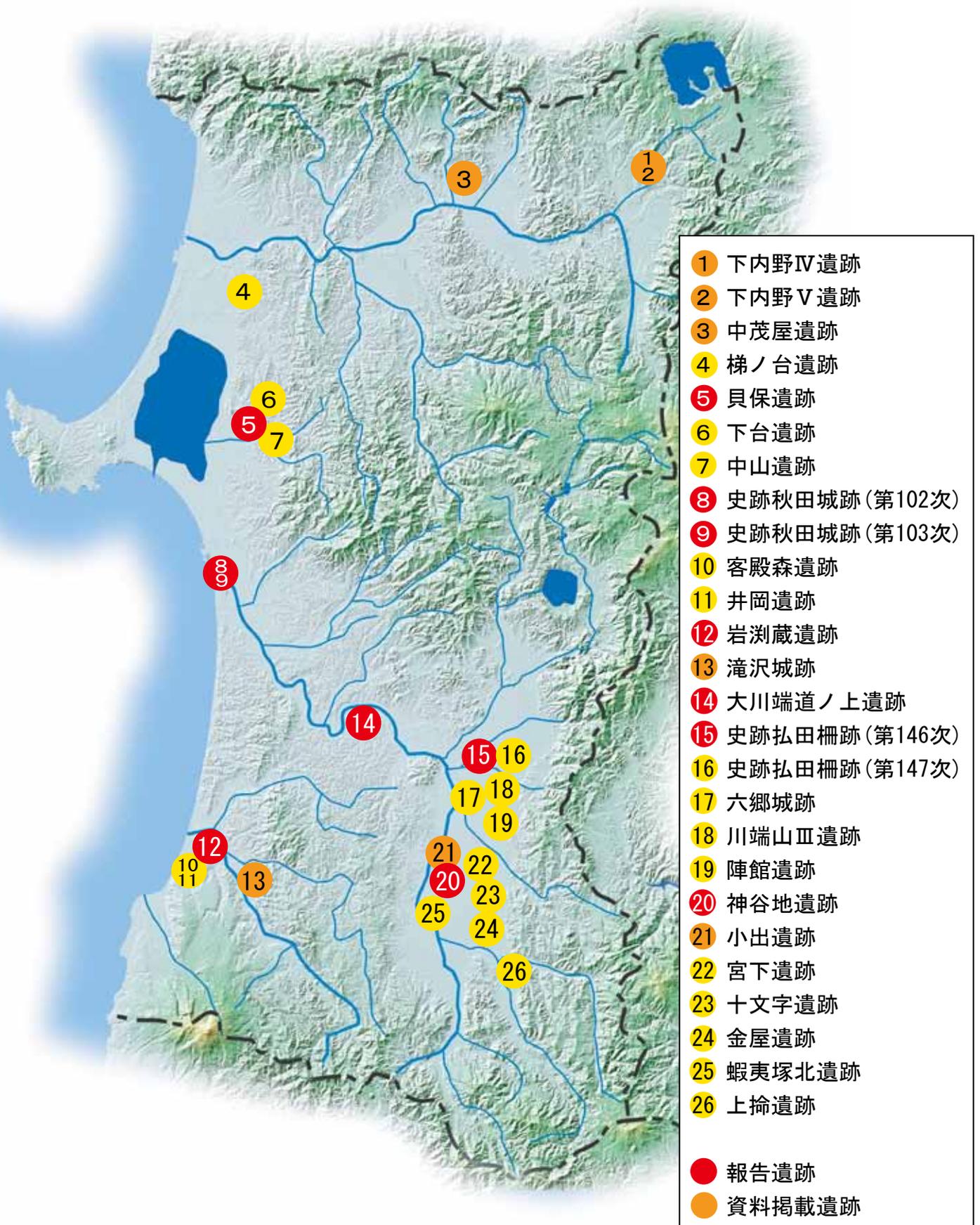
(太字は報告遺跡)

## 平成25年度県内発掘調査遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査面積 (㎡)	主な時代・遺跡の性格
1	下内野Ⅳ遺跡	鹿角市十和田大湯字下内野	鹿角市教育委員会	21	縄文：集落跡
2	下内野Ⅴ遺跡	鹿角市十和田大湯字下内野	鹿角市教育委員会	149	縄文：集落跡
3	中茂屋遺跡	大館市山田字茂屋屋布後	大館市教育委員会	136	縄文：集落跡
4	梯ノ台遺跡	能代市中沢字梯ノ台	能代市教育委員会	880	縄文：集落跡
5	<b>貝保遺跡</b>	八郎潟町川崎字貝保	秋田県教育委員会	1,210	奈良・平安：集落跡
6	下台遺跡	八郎潟町小池字岡本下台	弘前大学	100	縄文：集落跡
7	中山遺跡	五城目町高崎字中泉田	弘前大学	100	縄文：集落跡
8	<b>史跡秋田城跡 (第102次)</b>	秋田市寺内焼山	秋田市教育委員会	726	奈良・平安：城柵官衙跡
9	<b>史跡秋田城跡 (第103次)</b>	秋田市寺内焼山	秋田市教育委員会	70	奈良・平安：城柵官衙跡
10	客殿森遺跡	由利本荘市西目町西目字客殿	由理柵・駅家研究会	87	縄文：散布地
11	井岡遺跡	由利本荘市西目町西目字井岡	由理柵・駅家研究会	84	平安：集落跡
12	<b>岩瀨蔵遺跡</b>	由利本荘市美倉町	由利本荘市教育委員会	1,200	江戸：蔵屋敷跡
13	滝沢城跡	由利本荘市前郷字滝沢館	由利本荘市教育委員会	791	江戸：城館跡
14	<b>大川端道ノ上遺跡</b>	大仙市強首字大川端道ノ上	秋田県教育委員会	7,700	縄文・中世：墓域、貯蔵地・屋敷跡

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査面積 (㎡)	主な時代・遺跡の性格
15	<b>史跡払田柵跡 (第146次)</b>	大仙市払田字仲谷地	秋田県教育委員会	109	平安：城柵官衙跡
16	<b>史跡払田柵跡 (第147次)</b>	美郷町本堂城回字百目木	秋田県教育委員会	80	平安：城柵官衙跡
17	六郷城跡	美郷町六郷字古館	美郷町教育委員会	112	中世：城館跡
18	川端山Ⅲ遺跡	美郷町金沢東根字川端山	美郷町教育委員会	58	平安：集落跡
19	陣館遺跡	横手市金沢中野字根小屋	横手市教育委員会	410	平安：城館跡
20	<b>神谷地遺跡</b>	横手市雄物川町薄井字神谷地	横手市教育委員会	5,775	縄文・弥生・古墳・中世：集落跡
21	小出遺跡	横手市雄物川町薄井字小出	横手市教育委員会	2,758	縄文・古墳・中世：集落跡
22	宮下遺跡	横手市清水町新田字宮下	横手市教育委員会	464	縄文・奈良：集落跡
23	十文字遺跡	横手市清水町新田字街道下	横手市教育委員会	278	平安：集落跡
24	金屋遺跡	横手市平鹿町醍醐字金屋	横手市教育委員会	837	縄文・平安：集落跡
25	蝦夷塚北遺跡	横手市雄物川町造山字蝦夷塚	横手市教育委員会	125	奈良・平安：集落跡
26	上捨遺跡	東成瀬村田子内字菅生田捨	東成瀬村教育委員会	125	縄文：集落跡

(太字は報告遺跡、番号は右頁の位置図に対応します。)



平成25年度県内発掘調査遺跡位置図



# おお かわ ばた みち の うえ 大川端道ノ上遺跡

# こわ くび あざ おお かわ ばた みち の うえ 大仙市強首字大川端道ノ上

大川端道ノ上遺跡は、JR奥羽本線峰吉川駅の南西約2kmに位置します。北には雄物川が東西に流れ、南には乙越方面から北東に雄物川へ注ぐ小さな川が蛇行して流れています。遺跡は、二つの川の間に形成された自然堤防の上に立地します。調査区の標高は16.5～18.5m、雄物川との比高は約8mです(①)。今回の発掘調査は雄物川の堤防工事に先立つもので、縄文時代、中世の遺構・遺物などが見つかりました。



縄文時代の遺構としては、土坑・土器埋設遺構・焼土遺構が見つっています。これらは調査区北部と南部で多く見つかり、中央部ではあまり見つかりません。土坑は素掘りの穴で、中には袋のような断面形を持つもの(②)や、大きな石皿を埋めたもの(③)があり、木ノ実などの食料の貯蔵穴や墓として使われたと考えられます。土器埋設遺構は、土器を一回り大きな穴に埋め込んだもので、調査区の南端部で見つっています(④)。これについても、子どもを埋葬した墓の可能性もあります。たき火跡である焼土遺構は、調査区南側で多く見つっています。屋外で火を起し、採取した食料の調理や下処理を行ったのでしょう。調査区南端部は急な斜面で、遺物の大半はここから出土しています。縄文時代の土器の時期は、後期中頃が中心で、これに少量の晩期および弥生時代の土器が混ざります。遺構から出土した数少ない遺物も、そのほとんどが後期中頃のもので、このような状況から、人々の活動は縄文時代後期中頃に最も活発で、このころに貯蔵穴や墓の大部分がつくられたようです。住居と考えられる建物跡は見つかりませんでした。遺跡は今回の調査範





囲よりも東西に広がるものと推定されることから、調査区の外に人が住んでいた可能性もあります。縄文時代後期の終わり頃からは、人が一時的に訪れる場所であったようです。

中世の遺構は調査区北端部にまとまっていて、ここでは掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡が見つかっています。掘立柱建物跡は大小2棟あり(⑤)、大きい建物は梁行3間・桁行4間で南



側と西側に庇ひさしが付きます。小さい建物は梁行2間・桁行3間で北側に庇ひさしが付きます。どちらの建物も柱と柱の間隔は2.7mほど、庇の出は2.5mほどであり、2つの建物はほぼ同じ時期に建てられたと推測されます。建物の10mほど北には、斜面に沿って溝跡が巡っています。この溝跡は深さ0.15

m幅1.6mで調査区の西側へとさらに続いています。緩やかな斜面を掘り返して段差を付け、敷地を区画する目的の溝のようです。大きな建物と区画溝の間には、井戸跡が見つかっています(⑥)。

平面形は丸く、上部がラップのように開いています。井戸は埋められていて、下の方まで掘り下げると丸い掘り方の中に四角い痕跡が確認できました。井戸が崩れるのを防ぐために四角い木枠きわくが設置されていたと考えられます。井戸は深く、地表から3.3mの深さまで掘り下げましたが、底まで到達しませんでした。建物から20mほど南の地点では、浅い掘り込みから多量の炭とともに焼けた骨が出土しており、火葬墓かそうぼと推定されます(⑦)。これらの遺構から時期を特定できる遺物は出土していませんが、遺構が集中する調査区北端部で中国産の青磁せいじが出土していることから、鎌倉～室町時代の屋敷が存在したものと推定されます。

今回の調査で、雄物川のほとりで活動した人々の土地利用のようすを確かめることができました。雄物川を見下ろす地に中世の屋敷が立地することからは、水運とのつながりなどを想定できるかも知れません。





# 神谷地遺跡

## 横手市雄物川町薄井字神谷地

神谷地遺跡は横手駅から西に約15km、旧雄物川町館合小学校の近くに位置します。遺跡の西側約2.5kmには雄物川が、東側約1kmには大宮川がともに北に向かって流れ、これらに注ぐ小さな川筋に挟まれた微高地上に遺跡が立地しています。平成24年度に3,100㎡、平成25年度に5,750㎡の発掘調査を行った結果、縄文時代中期（約5,000～4,000年前）、縄文時代晩期（約3,000～2,400年前）、弥生時代（約2,400～1,700年前）、古墳時代（約1,700～1,400年前）及び鎌倉時代（約820～670年前）にわたって人々の営みがあったことが判明しました。縄文時代中期の集落が遺跡の北部に、晩期の墓域が南部に分布し、両者は一部重なり合っています。なお、遺構は発掘調査範囲の外側（主に東側）にも広がっているようです。

■縄文時代中期の様相・・・昨年度の調査では、30棟以上の<sup>たてあな</sup>竪穴建物跡がC字型に並んでいることを確認しました。竪穴建物跡は炉と柱穴を伴い、住居として利用されたと考えられます。今年度の調査では、C字型の部分の南～南東側にも、少なくとも15棟の竪穴建物跡が存在することがわかりました。竪穴建物跡の平面形は円形か隅の丸い台形で、直径は最大のもので7.0mあります（①）。炉は川原石をU字形あるいは台形に並べた<sup>いしがいろ</sup>石囲炉



（②）や、埋めた土器及び浅い穴を石囲炉に組み合わせた<sup>ふくしきろ</sup>複式炉（③）など、様々な形があります。出土する土器から竪穴建物跡の時期が判明すれば、このような炉の形の変化を時間軸に沿って確認することができるかもしれません。



■縄文時代晩期の様相・・・調査区東部からは、直径1.8mを越える大型<sup>どこう</sup>土坑が8基検出されました。土坑のうちのひとつ（④）は直径4m・深さ1.3m、断面は逆台形で、底面は砂層に達しており



湧水がありました。底面より少し上層からは樹皮や木材を敷いたような跡が確認され、クルミやトチの実が多数出土しました。隣接する大型土坑からは細かく割れたクルミの殻が層をなして出土しました。これらの遺構については、食用の堅果類を水漬けし、害虫を駆除したり殻を柔らかくして加工しやすくなるための施設であった可能性を検討しています。また、<sup>どこうぼ</sup>土坑墓及び<sup>どきかんぼ</sup>土器棺墓が合わせて



100基以上見つっています。土坑墓の平面形は楕円形で、石剣、ヒスイ製の勾玉や赤漆が塗られた糸の束などを副葬したのものもありました。

■弥生時代の様相・・・竪穴建物跡1棟と土坑1基を検出し、弥生時代中期の土器が出土しています。

■古墳時代の様相・・・竪穴建物跡1棟及び掘立柱建物跡1棟を検出しました。県内でこれまで検出された古墳時代の竪穴建物跡は2棟だけで、掘立柱建物跡の発見はありません。本遺跡に隣接する小出遺跡における各棟とともに貴重な発見となりました。



竪穴建物跡(⑤)は平面形が隅の丸い正方形で、一辺の長さは6.5mです。4本の柱で天井を支える構造で、カマドは設けられていませんでした。

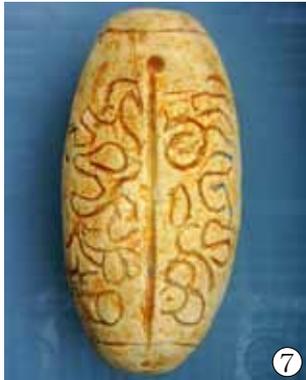
■鎌倉時代の様相・・・遺構外からかわらけ1点が出土しています。

■出土遺物・・・平成25年度調査だけでも、みかん箱程度の大きさの箱で約190箱分の遺物が出土しました。ほとんどが縄文時代のもので、土で作られた遺物(土器・土製品)と石で作られた遺物(石



器・石製品)に分けられます。縄文時代中期の土器は深鉢がほとんどで、東北南部を中心に分布する大木式のうち8a～10a式に属するものが多いようです。晩期の土器は深鉢・浅鉢・注口土器(急須のような形の土器)の他、小型土器(高さ数cm程度で、主に儀礼用と考えられる)などが出土しており、東北全域に分布する大洞BC式～A式に属します。

土製品では、縄文時代晩期の土偶が4点出土しています。大型土坑の底面から出土したものは片方の肩及び腕の部分で、中空で器壁は分厚く、乳房が強調されています(⑥)。



石器は縄文時代の石鎌(やじり)・石匙(携帯用ナイフ)・搔器(木や骨を削る道具)・石斧・石皿(食材等をすり潰す道具)などが出土しています。

石製品では、縄文時代晩期を中心に勾玉、小玉、岩偶、岩版、石剣(剣のような形をした儀礼用の道具)や腕輪などが出土しています。岩偶は大型土坑4基から1点ずつ出土しており、いずれもラグビーボール

のような形をしています。このうちの1点は長径19.6cm・短径10cmで、片面中央に長い線が彫りこまれ、その両側に写真のような文様が刻まれています(⑦)。

古墳時代の遺物は、建物跡の柱穴から土師器高坏及び甕が出土し、その形態から5世紀後半のものと考えられます。また、遺構外からは波状文のある須恵器片が出土しています。

今回の調査で、この地には縄文時代から鎌倉時代にかけて、断続的ではありますが非常に長い期間人々の暮らしがあったことがわかりました。縄文時代中期後半以降になると人々は徐々に台地から平地に進出し居住しはじめますが、その最初の頃の集落のかたちについて記録することができました。また、県内で例の少ない古墳時代の集落が発見されたことも大きな成果となりました。

(横手市教育委員会)



## 史跡秋田城跡（第102次・103次調査）

秋田市寺内焼山

史跡秋田城は、秋田市西部の寺内地区を中心とする標高40～50mの通称高清水丘陵上に位置する奈良～平安時代の古代城柵の遺跡です。昭和14年に国の史跡に指定され、国による調査を経たのち、昭和47年から秋田市教育委員会による保存管理のための調査が継続して行われています。平成25年度は史跡秋田城の北西部で第102次調査と第103次調査を行いました。

5月から9月にかけて行われた第102次調査は、秋田城の北西部の地点で、第92次調査A区で発見された外郭西門の周辺部です。外郭西門に取り付く外郭区画施設と門からの城内道路を把握することを目的に行いました。

調査の結果、古代の遺構として、築地塀2基、外郭西門掘り方8基、柱列塀跡2基、材木列塀跡1基、溝跡2条、土坑10基、土取り穴が発見されました。また、近世遺構として掘立柱建物跡、土取り穴、畝跡、溝跡、土坑などが確認されています。遺物は、土師器・須恵器などの古代の土器類や、瓦、埴、刀子などが出土しています。

第92次調査A地区で発見された西門は6時期（Ⅰ期～Ⅵ期）の変遷があり、南北3間×東西2間、三間一戸の八脚門であることがわかっています。今回の調査において、第92次調査A地区の調査区で検出できなかった外郭西門の柱掘り方を新たに発見しました。発見した柱掘り方は、西門Ⅴ期の2基、Ⅳ期の2基、Ⅱ期の2基、Ⅰ期の2基です（①）。これらにより外郭西門のより正確な規模を知ることができました。6時期の外郭西門の中では、Ⅲ期（8世紀末～9世紀初め）のものが最も大きく、南北（3.4m+4.25m+3.4m）×東西（4.2m+4.2m）の規模と推定されます。これは、これまで発見された秋田城の門としては最も大きなものです。外郭西門の規模はこれまで発見された東門・南門よりも全体的に大きく奥行きがあり、2階をもつ重層門である可能性があります。このような西門は、日本海を望む高台に立地しており、秋田城の海側からの「玄関口」といえるでしょう。

このような西門に取り付く外郭区画施設として、外郭西門Ⅰ期とⅡ期に伴う築地塀、西門Ⅲ期に伴う柱列塀、西門Ⅳ期に伴う柱列塀、西門Ⅴ期に伴う材木列塀が確認できました（②・③）。築地塀の幅は基底部分で2.1～2.2mと考えられます。これらの外郭施設は西門に取り付き、北に約6m





伸びると東に屈曲することがわかり、秋田城の外郭施設の北西コーナーの状況を把握することができました。

また、北西調査区の北西側では古代の土取り穴が広い範囲で確認されました。これらは外郭築地塀構築の際の粘土採取のためのものと考えられます。

外郭西門から城内への道路は、近世の土取り穴により大きく削平を受けており、はっきりとは検出できませんでした。外郭西門から南東側には倉庫群が発見されており、それらの遺構に通じる道路が発見される可能性は高く、今後の調査で把握していく必要があります。

10月から11月にかけて行われた第103次調査は、秋田城の北西部の地点で、第92次調査B区で発見された16世紀後半と考えられる土塁<sup>どるい</sup>の延長を確認することを目的に行いました。第92次調査B区では土塁の他に八脚門<sup>はつきゃくもん</sup>も発見されており、また、秋田城の北西端の丘陵は中世後期にも利用されていて、その実態把握を行っていく必要がある地区です。

中世遺構として、A・B区から土塁1基、土坑墓<sup>どこうぼ</sup>4基、C区から土塁1基が検出されました。中世遺構としての土塁はA区で確認され、東西方向に伸びていました(④)。これは、位置関係および土塁の特徴から第92次調査B区の北側土塁の延長であると考えられます。土塁の北側裾部には、直径2～3cmの円礫<sup>えんれき</sup>が敷かれている状況が確認でき、版築<sup>はんちく</sup>状に盛られ構築されていることがわかりました。また、土塁上部には溝跡が確認されています。土塁下からは2基の土坑墓が確認されました(⑤)。そこから、銭貨<sup>せんか</sup>(模鑄銭<sup>もちゅうせん</sup>、洪武通寶<sup>こうぶつうほう</sup>)が出土し年代は16世紀後半と考えられます。したがって、調査地周辺は16世紀後半に墓地としての利用があり、その後その上に土塁を構築したと考えられます。



また、C区からも、A区で確認された土塁の延長が確認されました。C区で確認された土塁も北側裾部に直径2～3cmの円礫<sup>えんれき</sup>が敷かれている状況が確認できています。

今回の調査で発見された16世紀後半に構築された土塁および第92次調査B区で発見された八脚門の位置づけを文献史料の記述と対応させると、天正17(1587)年に湊安東氏<sup>みなと</sup>と檜山安東氏<sup>ひやま</sup>の湊合戦において、「寺内の砦<sup>とりで</sup>」をめぐる攻防があったことが奥羽永慶軍記<sup>おううえいけいぐんき</sup>に記されており、これらの遺構群は、これに該当する可能性が高いと考えられます。

秋田城跡の北西部隣接地には14世紀～16世紀代の後城遺跡<sup>うしろじょう</sup>があり、秋田城北西部の焼山地区には中世遺構が展開している可能性が高く、今後さらに詳しく追求していく必要があります。

(秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所)





## 史跡<sup>し せき</sup> 弘田<sup>ほつ た</sup> 柵<sup>さく</sup> 跡<sup>あと</sup> (第146次調査)

## 大仙市<sup>ほつ た</sup> 弘田<sup>ほん どう</sup>、美郷町<sup>しろ まわり</sup> 本堂城回

史跡弘田柵跡の第146次調査は、外郭南門の外(東)側に復元された、大路東建物(S B1054A・B)の南側に隣接する、標高33mほどの休耕地を対象に実施しました。大路東建物は、平成5年度の発掘調査で確認され、復元整備されましたが、当時の調査区との連続性を再度確認するために、この建物の南側を走る、史跡の管理用道路を撤去して調査を進めました。

調査の結果、大路東建物の南側に接して、東西(梁行<sup>はりゆき</sup>)が2間で約6.5m、南北(桁行<sup>けたゆき</sup>)が3間で約7.8mとなる、掘立柱建物跡(S B1058)が確認されました(①)。この建物跡は、平成5年度の第94次調査で確認された3基の柱穴と、昨年度の第144次調査で確認された3基の柱穴、そして今年度新たに見つかった2基の柱穴でつくられます。また第142次調査では隣接する大溝跡と盛土整地等も検出され、1棟の建物跡と周辺の様子が確認されました。

S B1058掘立柱建物跡は南北に長く、10本の柱からなる切妻造<sup>きりつまづくり</sup>の建物であったと考えられます。建物の柱穴は、第94次調査で北西の隅柱<sup>すみばしら</sup>とその南側、及び北東の隅柱が、第144次調査で南西と南東の隅柱を含む3基が確認されていました。今回の調査で見つかったのは、東側柱列及び西側柱列のそれぞれ北から3基目の柱穴となります。調査区内は、北東から南西の方向にかけて、水の流れ



で浸食された凹地となっていて、開田する際に盛土された状況も確認されました。そのため、ほかの柱穴と比べると、30cmも低い位置で見つかりました。北側柱列の中央と、東側柱列の北から2基目の柱穴は見つかりませんが、今回確認された凹地の上手<sup>かみて</sup>にあたることから、第94次調査区の地中に、この2基の柱穴も確実に残っていると思われます。

大路東建物の一帯は、外郭南門東方官衙域<sup>がいかくなんもんとうほうかんがい</sup>と呼ばれ、弘田柵がつくられた9世紀初頭には、東西に長く南側に庇<sup>ひさし</sup>が付いた、大路東建物(S B1054A・B)が造られました。この大路東建物は、弘田柵で最も中心的な建物といえる、政庁の正殿<sup>せいちょうせいでん</sup>に準ずる格式を持ち、「調米」と書かれた木簡や、「厨」という文字が墨書された土器が見つかることから、9世紀の前半代にわたり、蝦夷<sup>えみし</sup>の人々をもてなすこと(饗給<sup>きょうきゅう</sup>)に関係した建物と考えられています。その際には、庇の正面となり、相対した南側の広場も一緒に使われたことが想定されます。また9世紀中頃には、重複する一回り小さな、梁行3間、桁行3間の、同じく東西に長い掘立柱建物跡(S B1055)へと変遷<sup>へんせん</sup>したことがわかっています。

S B1058掘立柱建物跡は、S B1054A・Bの底の柱穴から1mも離れず、基準となる向きも異なるため、同時存在は考えられません。また変遷したS B1055掘立柱建物跡とは1m程度しか離れていませんが、建物の向きがほぼ同じで、規模も同程度となっています。2つの建物面積を合わせるとS B1054A・Bの規模に近くなることから、2棟がセットになり、9世紀中頃以降に大路東建物の機能を



受け継いだ建物群であった可能性も考えられます。

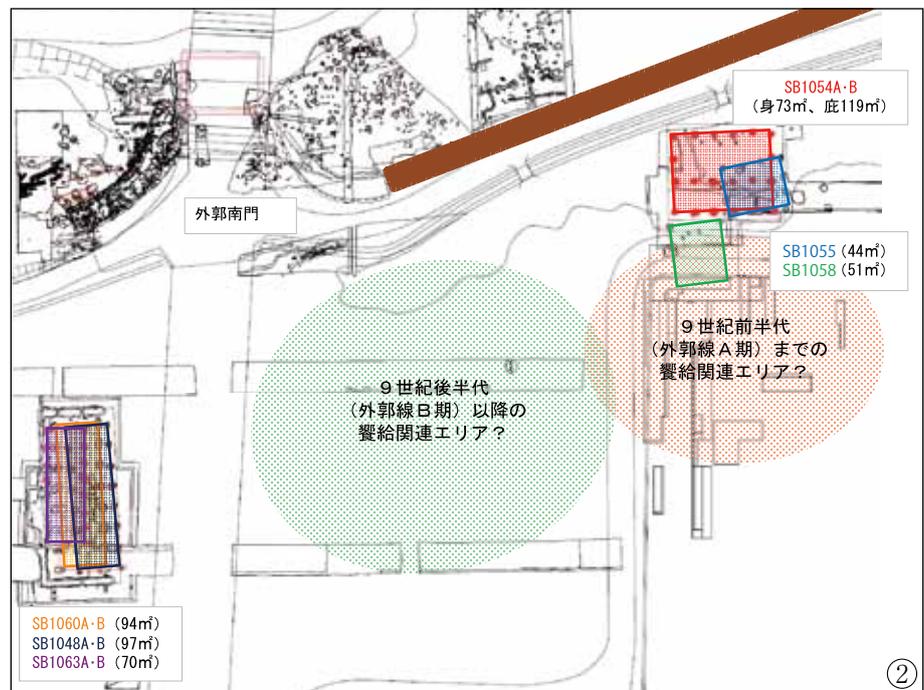
外郭線の外側にはもう1か所、外郭南門南西官衙域と呼ばれる、10世紀初頭～後半代に、南大路の西側に造られた、南北に長い建物（大路西建物）がありますが、その性格はよくわかっていません。

今回確認された建物跡（S B1058）が、もう一つの建物跡（S B1055）とともに、大路東建物の機能を受け継いだ施設であるとするれば、規模が大きく、広い微高地を前面に持つ建物跡（S B1058）が主（表）の建物となり、蝦夷の人々のもてなしに直接関わったと思われます。その場合、9世紀後半代には、建物正面に相対する広場を、西側のより広い微高地上に求めたことになり、そのため、向きを変えて建て替えたことが考えられます。大路西建物はこの広場をはさんだ反対側に位置することから、蝦夷の人々をもてなすための建物と広場について、東方官衙域での立地が困難となった結果、より高く安定した南西官衙域に移転したということも想定されます(②)。

9世紀中頃には地震災害等により外郭線の築地塀は倒壊し、全周が材木塀へと改修されます。また9世紀後半代には河川氾濫が頻発するようになり、低い土地の湿地化が進んだことも確認されています。築地塀が崩壊した土砂を避けて、建物を南側に移動せざるを得なくなったものの、東側にも小河川がせまることから十分な広さが確保できず、地形に合わせ暫定的に2棟の建物に分けられたのでしょう。地形が一段低くなる南側では、建物が無くなる10世紀初頭には、丘陵の裾野と高さを合わせるように、30cmほど嵩上げして盛土整地され、湧水の激しい丘陵の裾野との間には大きな溝が掘られ、小河川に排水されていたことも明らかになっています。

平成23年以降の調査により、従来、9世紀中頃までしか継続しないと考えられていた外郭線外側の東方官衙域において、9世紀後半代まで建物が継続し、10世紀初頭には低湿地部分が嵩上げ盛土され、大溝が掘られるという事実が明らかになりました。そして今回、全体が確認されたS B1058掘立柱建物跡により、

払田柵創建以来、東方官衙域が持っていた蝦夷の饗給という機能が、柵を巡る9世紀中頃以降の様々な変化に伴い、10世紀には南西官衙域に変遷した可能性について、一つの仮説として提示できるようになりました。来年度はこの仮説を検証する事ができるよう、さらに調査を進めたいと思います。





## 貝保遺跡

## 南秋田郡八郎潟町川崎字貝保

貝保遺跡は、J R奥羽本線八郎潟駅から南西2.2km、馬場目川右岸の沖積低地が広がる、標高7 mの微高地に立地する古代の遺跡です。貝保遺跡周辺にある古代の遺跡には、南西約2 km圏内に、秋田郡衙に比定する考えもある石崎遺跡、それに関連する祭祀場と思われる中谷地遺跡、さらに岩野山古墳群、北西0.8kmには鉄製品製作工房を伴う集落跡である開防遺跡があります。またこの馬場目川下流域一帯は、878年の元慶の乱に際し、中央政府に叛旗を翻した、十二村の一つ大河村おおかわに比定されている地域でもあります①。



貝保遺跡は平成13・14年度にも県道工事に先立つ調査が行われ、平安時代の掘立柱建物跡や鍛冶炉跡などの遺構、土師器・須恵器、鉄滓などの遺物を確認しています。

今回の調査は、前回調査区を挟んだ東西2か所で行いました。西側調査区では、狭い範囲に井戸跡が6基集中していました②。隣接する前回調査区や東側調査区でもそれぞれ1基ずつ井戸跡が確認されています。井戸跡はそれぞれ、径1.4~2.3m、深さは1.8~2.8mありました。井戸の構造は円形に地下水脈まで掘り下げた素掘りの井戸と、木製の隅柱と横棧で箱形に組んで周りに板を立て並べた、井戸枠を据えた作りの2種類があります。見つかった井戸の3基には、水を浄化させるための玉砂利が約5 cmの厚さで底面に敷かれていました。玉砂





③



④



⑤

利のすぐ上では、祭祀に関わると思われるトチやクルミが見つかっています。この他、井戸の埋め土からは、礫や土師器・須恵器・鉄滓・木製の鍬くわなどが見つかっています。井戸枠は2基で確認されています。1基の井戸枠は、隅柱の周りに、先端を平らに整えた板を立て並べていました。もう1基では、井戸枠が入れ子状になっていることから、内側へ井戸枠を追加して改修した可能性があります(③)。また、素掘りの井戸の内2基では、廃棄の際に埋められた後の窪みを利用し、火を焚いた痕跡が残され、炭の層が数層重なっていました(④)。土師器片が比較的多く出土していることから、土師器を焼成していた可能性もあります。その他、前回調査区でも確認した、北西から南東に延びる幅2m、深さ1mの溝の延長が確認されました。総延長は36mにも及びます。水が流れた痕跡がないため、土地を区画するための溝と思われます。溝の北側に当たる、前回調査区及び東側調査区でも柱穴様ピットちゅうけつようが多数確認され、掘立柱建物が数棟建っていたと思われませんが、南側では、あまり確認されていません。

また東側調査区では、幅1.3m、深さ0.6mの溝や、カマドのみの確認ですが、たてあな竪穴建物跡が1棟確認され、かめ たかつき長胴甕や高坏などの土師器が出土しています(⑤)。カマドは、厚さ7cm、幅45cmの板状の石を袖のしんざい芯材に使って作られていたことがわかりました。竪穴建物跡を埋め立てた後に、溝が掘られていることや建物跡で見つかった土器が、遺跡内で確認された他の土器と

比べ古いことから、奈良時代の可能性があります。その他、つき須恵器坏を横にして埋めた土器埋設遺構が確認されています。柱穴様ピットが集中する区域にあることから、建物に関する地鎮を意図したと考えられます。

貝保遺跡は、前回の調査では9～10世紀の平安時代の集落と考えられていましたが、今回の調査では、8世紀代の奈良時代と思われる遺構・遺物の他、12世紀初頭の白磁も見つかっています。また隣接する開防遺跡では、11世紀代の遺物も確認されていることから、この周辺では、奈良～平安時代の集落が継続的に営まれていたことがわかりました。



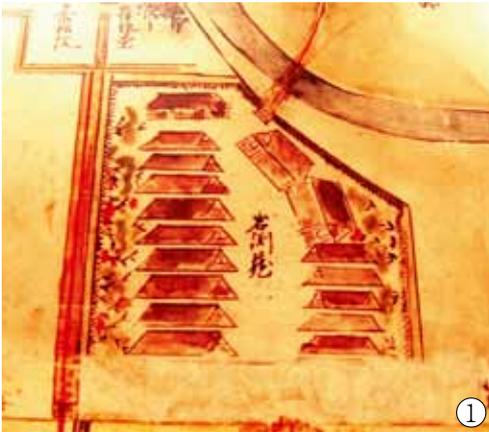
# 岩<sup>いわ</sup>渚<sup>ぶち</sup>蔵<sup>くら</sup>遺跡

由利本荘市美倉町<sup>みくらまち</sup>

岩渚蔵遺跡は、JR羽後本荘駅の西北西約0.9km、子吉川の左岸、標高6mの沖積地に立地します。遺跡北東側は子吉川の入り江状になった低地で、遺跡は低地に面した微高地にあります。岩渚蔵は、江戸時代の本荘城下に設置された蔵屋敷で、江戸時代の絵図に位置や名称などが記され(①)、町名の由来になりました。

平成19年の調査に続き、今回は東に隣接する旧本荘図書館や本荘文化会館跡地を調査し、平安時代、中世、江戸時代の遺跡であることを確認しました。

平成19年の調査では、遺跡の西部で幅5m余り、深さ約1.3~2.3mの水路跡が見つかりました(②)。



南から北へ段状に深くなり、遺跡北側の低地の方に延びていて、小舟による運搬のための水路の可能性がります。明治時代になり、岩渚蔵の廃絶後も浅いくぼみとして残り、陶磁器、瓦、木製品、木材などが多量に捨てられ、後に敷地境界になっていました。

今回の調査区は遺跡南東部で、東から掘立柱建物跡群、空闲地、大溝跡という配置になっていたことがわかりました(③)。

建物跡は、地面を削り残したやや高い場所に位置し、いずれも東西に細長く、ほとんどが長さ15~18m、幅5~7.5mほどの規模と推定され、ほぼ同じような場所で何度か建て替えられています。早い時期には柱がやや太く、1本ごとに柱穴が掘られています。後には柱筋に布掘りの溝を掘り、約12cmの角柱を1m前後の間隔で立てる構造に変化します。南





北に何棟か並んでいたようで、建物の機能が長く継続され、その形状から倉庫と推定されます。この場所では瓦や壁土片が出土せず、板倉と推定しています。建物跡の南側の敷地南端近くでは、板塀と思われる小規模な布掘りの柱列も見つかっています。

大溝跡は長さ12mを確認し、一部を掘り下げたところ大小の溝が一組になっていて、大きい方は幅約3m、深さ1m余りで、ここでは規模が小さいのですが、②の水路跡と同じように水路の一部の可能性が考えられます。

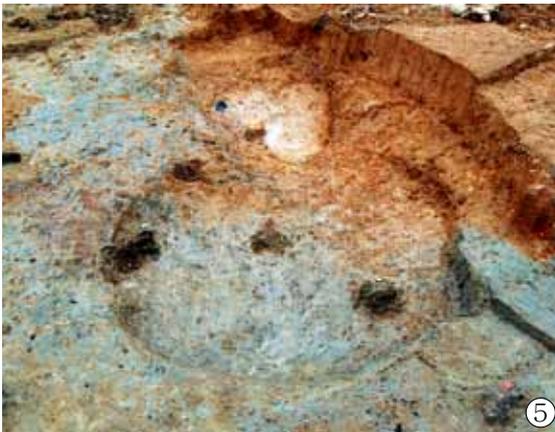
大溝跡と建物の間にある空閑地は、構造物がほとんど造られず、作業場のような使われ方が想定されます。ここでは1～2m前後の大きさで浅い土坑が3基確認され、うち1基からは「本庄…」と書かれた荷札とみられる木簡や箸などの木製品がまとまって出土し、ゴミ穴と考えられます。

これとは別に、建物よりも古く、筒形や漏斗形の深い土坑が4基散らばって見つかっています。井戸枠のような木組みが残るものもありました。

江戸時代の遺物は、陶磁器、木簡や漆器などの木製品などが出土しました。出土量は少なく、生活の場とは違う様子を示しています。変わったものとしては、整地層から出土した、2枚を合せ口にして埋められた皿（④）がありました。



平安時代の遺構は、江戸時代以降に多くが壊されていましたが、平安時代の遺物は全体の90%以上を占め、広く出土しています。江戸時代の建物跡群の東側で、土師器を焼成した可能性がある土坑（⑤）が見つかり、9世紀中ごろの土師器、須恵器が多数出土しました（⑥）。



10世紀以降の土器も多く、底が厚く台状になった土師器の坏や皿が多い特徴があります。他にも出土することが少ない珍しい土器が含まれ、平安時代の重要な遺跡でもありと考えられます。

今回の調査は、江戸時代の蔵屋敷での活動を想像する手がかりが得られ、これまで文書を中心に研究・学習されてきた本荘城下の歴史を、新たな視点で見つめ直すきっかけとなりました。合わせて、不明なことの多い子吉川河口部の古代の様子についても、少しずつ解明を進めていきたいと思えます。

（由利本荘市教育委員会）



## しも うちの 下内野Ⅳ・Ⅴ遺跡

と わ だ おお ゆ あざ しも うちの  
鹿角市十和田大湯字下内野

下内野Ⅳ・Ⅴ遺跡は、鹿角市の北部、大湯温泉郷おおゆの北にそびえる黒森山の南側に広がる台地上に立地する遺跡です(①)。黒森山周辺には、以前から多くの遺跡が存在することが知られており、台地上に広がる畑地では耕作により土中から抜き取られた、大湯環状列石に使われている石と同じような石材が集められている地点も確認されていました。この台地上の遺跡の調査は、平成22年度から大湯環状列石かんじょうれっせきに関連する遺跡の調査として続けてきました。台地の西端には、平成22・23年度の調査で、大湯環状列石と同じ縄文時代後期に作られた、環状配石遺構かんじょうはいせき いこう2基が発見された下内野Ⅲ遺跡がありません(②)。



下内野Ⅳ・Ⅴ遺跡は平成24年度の調査に続き2年目の調査になります。この2つの遺跡は、平成24年度の調査で、畑から抜き取られた石材が集められた地点の近くを試掘した際に発見された遺跡です。

下内野Ⅳ遺跡は、台地西端にある下内野Ⅲ遺跡から北東へ約600m、黒森山の山裾と沢で区切られた台地の北端に位置します。以前はリンゴの栽培が行われており、その際に畑から掘り出した1m前後もある川原石が畑の入口に沢山積まれていました(③)。土の中から掘り出された山積みの川原石があることから、大湯環状列石のような配石遺構群の存在が期待されていました。発掘調査では耕作等に影響を与えないように8か所の部分的な調査を行い、たてあなじょう竪穴状遺構3基、どこう土坑2基、柱穴3基を確認し、遺跡の主な時代は縄文時代中期後半であることがわかりました。今回の調査では、予想されていた配石遺構は確認されず、川原石が抜き取られたような痕跡も確認されませんでした。





下内野V遺跡は下内野Ⅲ遺跡の北東約200mに位置する遺跡で、環状配石遺構が確認された下内野Ⅲ遺跡に近く、やはり大型の川原石が畑の脇に山積みになっている部分も確認されていることから、大湯環状列石と同時代の遺跡が存在することが期待されていました。発掘調査では部分的な発掘を21か所で行い、<sup>たてあな</sup> 堅穴住居跡3棟、<sup>いしがいろ</sup> 堅穴状遺構1基、石囲炉1基、<sup>りっせき</sup> 立石遺構1基などが確認されました。主な時期は縄文時代前期から後期にかけての遺跡であることがわかりました。堅穴住居跡3棟は、堅穴を覆っていた土から出土した土器によって縄文時代前期の可能性が考えられます。その内の1つはほぼ全体を発掘し、中央に地床炉、堅穴の内側に6本の柱穴、外側にも浅い柱穴がある建物であることがわかりました。地床炉の土が焼けた部分の周りは浅く凹んでいることから、もともとは石で囲んでいた炉の可能性もあります(④)。石囲炉はコの字型に石が並べられ、石の途切れている部分の少し先に細長い石を斜めに建てた立石遺構が発見されました(⑤)。これらは近くから出土した土器から縄文時代後期中葉のものと考えられます。周辺の調査でもこの時代のものがほとんど発見されていないことや、石囲炉の石や土には焼けた痕跡がほとんどないことから、どのような意味があるのかはわかりません。また、この上の層からは扁平な石が間隔を空けて弧状に置かれているのも確認されていますが、時代や目的はわかりません。石囲炉は土に埋もれていたと考えられ、立石遺構のみが地面から頭を出していたことに関係があるのかもしれませんが。

黒森山周辺ではこれらの遺跡の他に、今年度新たに発見された上内野Ⅰ遺跡の分布調査で、大湯環状列石と同様の川原石を使用した配石遺構(⑥・⑦)

も発見されました。これまでの黒森山周辺の調査によって縄文時代前期から後期にかけて、人々が台地上で地点を変えながら住み続けていることがわかりました。また、大湯環状列石との関係などについて考える上でも、重要な情報が得られる地域であることが確かめられました。(鹿角市教育委員会)





## 中茂屋遺跡

## 大館市山田字茂屋屋布後

中茂屋遺跡は、大館市の西部、J R 早口駅から北へ約 4 km に位置する縄文時代の集落跡です。遺跡は米代川の支流である岩瀬川下流域の左岸、標高約 65 m の河岸段丘上に立地します。遺跡が所在する茂屋地区は、西は十ノ瀬山を中心とする山塊、東は茂屋方山を中心に連なる山塊に挟まれており、地区のすぐ西側を岩瀬川が南へ流れています。

今回は、昨年に引き続き、大館市公共下水道工事に伴い、工事に係る約 136 m<sup>2</sup> を対象に発掘調査しました。調査は、茂屋集落北西部の市道部分の長さ約 160 m、幅約 70 cm ～ 1 m を対象に行いました (①)。



調査区は川べりに立地していることから川原石が多く、幅の狭い区域だったこともあり、調査は難航しました。

基本土層は、表土・盛土の下に、Ⅰ層：黒褐色土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：黒褐色土、Ⅳ層：暗褐色土、Ⅴ層：黄褐色土、Ⅵ層：砂礫層となっています (②)。このうち主にⅢ～Ⅴ層から縄文時代の遺物が出土しました。



調査の結果、縄文時代中期～後期の竪穴建物跡 4 棟、土坑 2 基、配石遺構 1 基、地面が焼けた跡 (焼土) 6 か所、自然流路跡 9 条程が見つかり、遺物は縄文土器や石器、土・石製品が出土しました。

竪穴建物跡は調査区北部から 4 棟が集中して見つかりました。細長い調査区のため一部を検出したにすぎず、全体形は不明ですが、いずれも円形プランの建物であったと推測されます。確認面から床面までの深さは 30 ～ 60 cm 程ありました。このうち一番南側の建物跡からは、複式炉と呼ばれる石が組まれた炉跡が見つかりました (③)。炉跡は竪穴の壁際にアルファベットの「A」字状に石を並べたものと推定され、壁際には穴が掘られていました。炉内からは焼土や炭化物はほとんど出土していませんが、他の調査事例から、この中で煮炊きをし、壁際の穴から灰を掻き出したものと考えられます。炉の石で囲まれた中には、土器片がびっしりと敷き詰められていました。壊れた土器を割って再利用したものでしょう。県内の類例





としては、鹿角市御休堂遺跡が挙げられます。

土坑は2基確認されましたが、掘り込みがはっきりしておらず、自然にできた窪みの可能性もあります。配石遺構(④)は、川原石を組んだもので、住居の炉跡の可能性も考えられますが、周辺に明確な掘り込みは確認されず、調査では明らかにできませんでした。焼土(⑤)は6か所見つかっていますが、Ⅱ層とⅢ層で確認されていることから、使用された時期の違いがあります。焼土上面からは明確な遺物が出土していないため、はっきりとしたことはわかっていませんが、焚火をした跡と考えられます。

このほか、自然の流路跡とみられるものが9条程見つかりました。近代には埋没し、現地表面からは確認できませんが、以前は遺跡の立地する段丘内を幾筋かの沢が岩瀬川へ流れていたものと考えられます。この沢跡の堆積土中より縄文土器片や石器のかけらが少量出土していますので、縄文時代以降に沢が氾濫したことにより、遺物が流されたのでしょう。

遺物は、縄文時代前期末から後期初め頃までの土器、石器、石製品が出土しました。注目されるのは石器の豊富さです。器種には、石鏃<sup>せきぞく</sup>、石槍<sup>いしさじ</sup>、石匙<sup>いしべら</sup>、石篋<sup>せきふ</sup>、石斧<sup>いしづ</sup>が挙げられます。石器の大半は剥片(石器製作の際のかけら)ですが、完形のものも多く、良質な頁岩<sup>けつがん</sup>が用いられています。石鏃は11点出土しています。中には今でも刺さると痛そうな鋭利なものもあります。石槍は長さ約20cmの完形品が出土しました(⑥)。石斧は磨製<sup>ませい</sup>で、完形のもので2点見つかっています。珍しいものとしては長さ4.8cmしかないミニチュアの磨製石斧<sup>ませいせきふ</sup>があります。実用品ではなく、祭祀などで使用されたと考えられますが、通常の磨製石斧と同じ形態をしており、きちんと刃もつけられています。このほか、土製品や石製品として、中心に穿孔された有孔の土製品や石製品(⑦)が出土しました。装身具として用いられたものと考えられます。

昨年と今回の2か年にわたる調査により、岩瀬川流域の縄文時代の集落跡の姿がおぼろげながら見えてきました。中茂屋遺跡に暮らした縄文人は、岩瀬川の川べりに居を構え、豊富な石器を有していたことが分かりました。また、昨年発見された「北陸系土器」は新聞等でも話題になりました。今後は、遺物の整理作業を進め、より詳細な検討を行い、遺跡の様相を明らかにしていきたいと思います。

(大館市教育委員会)





## 滝沢城跡

## 由利本荘市前郷字滝沢館

滝沢城跡は、鳥海山ろく線前郷駅から南西へ0.4km、子吉川中流域右岸の沖積地に形成された標高約17mの段丘上の南端に立地します。滝沢城は、最上氏家臣滝沢兵庫頭政道が慶長8（1603）年から同11年にかけて築城し、元和8（1622）年に最上氏の改易とともに破却された平城です。由利本荘市由利地域の中心部である前郷地区は、江戸時代初期に滝沢氏が整備した城下町です。方眼状の町割に



は、要所に食い違いの変形十字路があるなど、現在も当時の城下町の特徴がよく残されています。滝沢城は、江戸時代の『出羽国最上記』に、本丸・二の丸・三の丸、内堀・外堀で構成されていることが記されていますが、絵図等が残されていないことから、詳細は不明です。しかしながら、現在も「滝沢館」「古堀」の字地名が残り、地籍図からもその城域が想定できます。平成11・15年度に由利町教育委員会は、旧前郷小学校グラウンドおよび町営滝沢館団地付近の試掘調査を実施し、内堀跡の位置を明らかにしました。これらのことから、滝沢城の城域は、現在の前郷市街地の約4分の1におよぶ範囲にあたることわかりました。

滝沢城跡発掘調査は、平成23年度から続く市営滝沢館団地建替事業に伴うもので、平成24年度には団地の北側2区画の発掘調査を実施しました。今年度はその事業に伴う発掘調査の2か年目で、調査地は滝沢城の城域の東側、本丸の東端付近にあたります(①)。

調査の結果、内堀跡、掘立柱建物跡、竪穴状遺構、溝状遺構、井戸跡、土坑、柱穴様ピット等が見つかりました。



内堀跡は、昨年度の調査で確認した南側の延長上にあたる、調査範囲の東端で確認されました。しかし、これまでの南北方向の内堀は、今年度の調査範囲の南東隅で南から西へ折れて西へのび、その北壁は調査範囲の南端にかかると推定されていましたが、内堀の南東隅と北壁は確認できませんでした。よって、南北方向の内堀はさらに南側へ延長するこ



とがわかりました。また、昨年度の調査では内堀の壁際に壁土が崩れるのを防ぐ土留めと考えられる杭列が出土しましたが、今回の調査では杭列は確認できませんでした。掘立柱建物跡は、桁行約4m、梁行約4m、柱の間が2間×2間のほぼ正方形の建物跡が見つかりました(②)。調査範囲の南端に位置することから、柱列が南側に延長する可能性もあります。南東隅の柱穴からは瀬戸・美濃産の皿が出土しました。溝状遺構は複数見つかりました。いずれも調査区外に続いており、全容は不明ですが、このうち北東-南西方向の溝状遺構は幅が約1.5~2.2m、深さが約0.6~1.6mで、調査範囲北端では南からのびる溝状遺構と合流し、その交点で急に落ち込んでいました(③)。井戸跡は直径1.2m、深さ2.1mのもの(④)、直径1.6m、深さ1.9mのもの2基が見つかりました。いずれも井戸枠材は残されていませんでしたが、前者の井戸の底からは、栓がついたままの蓋(⑤)や柄板、提手板、側板、底板等が出土し、樽材と考えられます。



遺物は、明(中国)からの輸入品の青磁や染付の碗や皿のほか、瀬戸・美濃、肥前産の陶磁器、樽などの木製品、鍛冶作業で炉を高温にするための送風装置である「フイゴ」の羽口(送風管)などが出土しています。



遺構から出土した今から約400年前の戦国時代末葉から近世初頭の遺物は、文献記録に示される滝沢城の継続期間に重なるもので、昨年度調査と同様に、城の様相を検討する良好な資料が得られたと言えます。滝沢城は築城から破却までわずか20年ほどしか存在しませんでした。その期間は同じく最上氏家臣の本城(楯岡)氏による本城築城期にも当たり、近世初頭の由利地域を考察するうえで重要な遺跡といえます。

(由利本荘市教育委員会)



## 小出遺跡

## 横手市雄物川町薄井字小出、字神谷地

小出遺跡は、神谷地遺跡の西側に隣接し、小出集落の南東側に位置します(①)。

調査の結果、古墳時代中期(約1,500年前)と鎌倉～室町時代(約820～440年前)を中心とする遺跡であることが確認されました。

古墳時代の検出遺構は<sup>たてあな</sup>竪穴建物跡1棟、<sup>ほったてぼしら</sup>掘立柱建物跡3棟、遺物は土<sup>は</sup>師器と須恵器などが出土し、古墳文化圏の集落であることがわかりまし



た。横手盆地内での古墳時代の竪穴建物跡の検出は、横手市オホン清水B遺跡で検出されて以来で、県内では由利本荘市宮崎遺跡の竪穴建物跡を含めても3例目の約30年ぶりの貴重な発見でした(②)。



竪穴建物跡は長軸7.1m、短軸6.8mで、面積が約48㎡です。壁際には壁板を立てるために設けたと思われる溝が巡り、その壁際から1.5m内側に支柱穴が均等に配置されていました。南側の壁には土坑状の窪みがありましたが、建物中央部に被熱の痕跡が確認されたことから、カマドを持たない地床炉であった可能性が高いと思われます。またひとつの柱穴の確認面には土師器が置かれていました

(③)。鮮やかな朱色をしており、その器形から宮城県の南小泉式を標識とする土師器の坏であることがわかりました。その柱穴の深さを確認するため断ち割ったところ、長さ約1m、直径約19cmの柱が残存しており(④)、他の柱穴でも同じでした。このことから建物を廃絶する際に柱材を切断し、その上に土器を置いた祭祀行為があったことが考えられます。さらにその上面には柱材を燃やしたと思われる炭化材が確認されています。





⑤

竪穴建物跡から南に約25mの場所で、総柱の掘立柱建物跡が見つかりました(⑤)。梁行<sup>はりゆき</sup>2間(約5.5m)、桁行<sup>けたゆき</sup>3間(約4.8m)で、面積は約26㎡です。柱掘り方は径約40cmの略円形、深さは約50cmでした。また桁行側の中央部分には、掘り方が径約25cmの略円形で、深さ約70cmの柱穴があります。機能については今後検討を加えなければいけませんが、高床倉庫と考えられます。この掘立柱建物跡

は柱が抜き取られていました。竪穴建物跡同様に抜取穴の確認の際に、土師器の甕<sup>かめ</sup>が出土しました。竪穴建物跡と掘立柱建物跡は同じ向きに配置し、柱の抜取穴に土器を納める共通した儀礼を行っていることから同時期に存在し、その後廃絶されたものと考えられます。

中世では、掘立柱建物跡3棟が検出され、遺物は須恵器系中世陶器及び中国産青磁碗<sup>せいじわん</sup>などが出土しました。

掘立柱建物跡3棟の配置は、北から見ると「コ」字状<sup>ひさし</sup>をしており、四面に庇の付いた可能性のある建物跡2棟と側柱建物跡1棟で構成されています。中心となる建物跡の半分は残念ながら調査区外でしたが(⑥)、柱間より建物の規模を推定することができ、梁行4間(身舎5m+庇2.4m)、桁行6間(身舎10m+庇2.4m)で、面積は約92㎡と考えられます。



⑥

柱掘り方は径約40~50cmの略円形、深さは約50cmでした。2回建て替えられた痕跡を確認することができたことから、ある程度の期間同じ場所に存在していたこととなります(⑦)。また新たに掘り直した柱掘り方より須恵器系中世陶器の壺の底部破片が出土したことから、古墳時代と同じように廃絶儀礼を行っていることがわかりました。またこの陶器は建物の終末を表す年代根拠となることから、今後比較検討を行う予定です。さらにこの柱掘り方を底面まで掘っていくと板材を利用した礎板が見つかりました(⑧)。つまり最初の建物の柱はこの礎板上にあり、その後柱を抜いて新たな柱掘り方を掘ったことの証明となります。他の柱掘り方でも同様で、中には曲げ物の桶底を転用しているものもありました。



⑦



⑧

今回の調査によって、古墳時代の竪穴建物跡と総柱の掘立柱建物跡で構成される集落が見つかったことは横手盆地の開発の歴史を考える上で重要な発見です。また鎌倉時代から室町時代の大きな建物を伴う集落も類例が非常に少なく、古代から中世にいたる地域史の解明につながることでしょう。

(横手市教育委員会)

# 年 表

年代	時代	県内の主な遺跡	秋田県の歴史	日本の歴史		
約30,000年前	旧石器時代	縄手下 (能代市) 家の下 (三種町) 風無台Ⅰ (秋田市) 小出Ⅳ (大仙市) 米ヶ森 (大仙市)	秋田県に人が住みつき、ナイフ形石器や台形石器を使う。	日本列島に人が住みつき、石器を使った狩猟生活を行う。		
約13,000年前	縄文時代	草創期	岩瀬 (横手市)	大型の堅穴建物がつくられる。地方色豊かな円筒土器、大木式土器がつくられる。		
約9,000年前		早期	◎岩井堂洞窟 (湯沢市) 菖蒲崎貝塚 (由利本荘市)		土器づくりが始まる。狩猟生活が盛んになる。	
約6,000年前		前期	池内 (大館市) 上ノ山Ⅱ (大仙市) ◎杉沢台 (能代市) 中茂屋 (大館市)		北陸で火焰土器がつくられる。	
約5,000年前		中期	○萱刈沢貝塚 (三種町) ○一丈木 (美郷町) 天戸森 (鹿角市) 神谷地 (横手市) 下内野Ⅳ (鹿角市)			
約4,000年前		後期	●大湯環状列石 (鹿角市) 下内野Ⅴ (鹿角市) ◎伊勢堂岱遺跡 (北秋田市) 大川端道ノ上 (大仙市) 高屋館跡 (鹿角市) 漆下 (北秋田市)		大規模な共同墓地がつくられる。	北海道・北東北の各地で環状列石がつくられる。 関東で環状の貝塚がつくられる。
約3,000年前		晩期	白坂 (北秋田市) 戸平川 (秋田市) ○矢石館 (北秋田市) ○柏子所貝塚 (能代市) ○湯出野 (由利本荘市) 鏡田 (湯沢市)			亀ヶ岡文化が栄える。 九州で水田稲作が始まる。
約2,300年前	弥生時代	◎地蔵田 (秋田市) 横長根△ (男鹿市) はりま館 (小坂町)	狩猟・採集を中心とする生活に稲作が加わる。	邪馬台国の卑弥呼が中国に使いを送る。		
約1,700年前	古墳時代	寒川Ⅱ (能代市) 小出 (横手市) 下藤根 (横手市)	北海道と同じ土器や墓がつくられる。	前方後円墳がつくられる。 律令政治が始まる。		
西暦710年	古	奈良時代	○岩野山古墳群 (五城目町) ◎秋田城跡 (秋田市) 竹原窯跡 (横手市) 柏原古墳群 (羽後町)	出羽国を置く。 出羽柵を秋田高清水岡に遷す。 雄勝城、由理柵がつくられる。	平城京に都を遷す。 和同開珎がつくられる。 東大寺の大仏が建立される。	
794年	代	平安時代	◎弘田柵跡 (大仙市・美郷町) 胡桃館 (北秋田市) ○横山 (由利本荘市) 貝保 (八郎潟町) 高野 (仙北市) ◎大鳥井山 (横手市) ○矢立廃寺跡 (大館市)	元慶の乱が起こる。 十和田湖(火山)が噴火する。 清原氏が栄える。	平安京に都を遷す。 坂上田村麻呂が征夷大將軍となる。 平将門の乱が起こる。 源氏物語・枕草子が書かれる。 平泉に藤原氏が栄える。	
1192年	中世	鎌倉時代	○大畑窯跡 (大仙市) 観音寺廃寺跡 (横手市)	鎌倉御家人が秋田に入る。	源頼朝が鎌倉幕府を開く。 承久の乱が起こる。 元寇が起こる。	
1338年		室町時代	洲崎 (井川町) 後城 (秋田市) 竜毛沢館跡 (能代市) 館堀城跡 (湯沢市)	秋田湊が栄える。	足利尊氏が室町幕府を開く。 応仁の乱が起こる。	
1573年		安土桃山時代	○山根館跡 (にかほ市) ○戸沢氏城館跡 (仙北市) ○本堂城跡 (美郷町) ○豊島館跡 (秋田市) ◎脇本城跡 (男鹿市) ◎檜山安東氏城館跡 (能代市)	安東氏、小野寺氏、浅利氏、戸沢氏、六郷氏などが各地で戦う。	織田信長が安土城を築く。 豊臣秀吉が天下を統一する。 関ヶ原の戦いが起こる。	
1603年	近世	江戸時代	久保田城跡 (秋田市) 滝沢城跡 (由利本荘市) 岩淵蔵 (由利本荘市) △旧秋田藩主佐竹氏別邸(如斯亭)庭園 (秋田市) ○白岩焼窯跡 (仙北市)	佐竹義宣が秋田に転封される。	徳川家康が江戸幕府を開く。	

太字は報告・展示遺跡

●国指定特別史跡

◎国指定史跡

△国指定名勝

○県指定史跡

## 平成25年度 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料

編集・発行：秋田県埋蔵文化財センター 発行日：平成26年3月9日(日)  
〒014-0802 秋田県大仙市弘田字牛嶋20番地  
電話 0187-69-3331 FAX 0187-69-3330 e-mail maibun@pref.akita.lg.jp